
艦魂年代史外伝 ～金剛と三笠 受け継がれし大和魂～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂年代史外伝 〈金剛と三笠 受け継がれし大和魂〉

【Nコード】

N8376F

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

太平洋戦争中期の年末、大和や金剛達は大掃除の作業に追われていた。そんな中で見つけた金剛の少女時代の写真。それをきっかけに金剛の昔話が始まる。時は大正時代。新鋭巡洋戦艦『金剛』はイギリスから日本へやって来た。迎えてくれるのは日露戦争の勇士やその後に生まれた戦艦の艦魂達。そして、日本海海戦でバルチック艦隊を葬った英雄王、戦艦『三笠』の艦魂もいた。伝説の存在として英雄王と謳われる三笠の本当の姿とは。そして少女時代の金剛と三笠の関係は。金剛と三笠の知られざる物語。金剛のかわいい頃が

大暴露されるお話です。

（前書き）

明けましておめでとうございます。

昨年は多くの艦魂作家が生まれ、すっかり僕の影が薄くなった年でした。

今年もまたよろしく願います。

という訳で、新年一発目は金剛の過去が明かされるお話です。

少女時代の金剛は一体どんな子だったのか。

途中挫折した日露戦争編のキャラも登場。

大正時代を舞台に金剛と三笠の絆が結ばれます！

隼鷹じゅんようが翔輝しょうきの事を《お兄ちゃん》と呼ぶようになった直後の一九四二年の年末。トラツク島在泊の連合艦隊の各艦艇の艦魂達は、清き心で年を越そうと帝国海軍恒例の年末大掃除作業に追われていた。平時はもちろん有事でさえ、艦魂達は新年を明るく明けようと大掃除をする。現代のようにクリスマスなどという行事がない為、大掃除期間は年末二週間前くらいから行われ、艦魂達は皆必死になって自艦の掃除。さらに余裕があれば仲間艦の掃除を行う。帝国海軍の新たな年明けを迎える為の重要な行事。それが年末大掃除作戦である。

戦艦『金剛』いそがきの一室にして金剛の自室である部屋では金剛が榛名はるなと共に大掃除作業を行っていた。
「ゲホゲホッ！ 結構ゴミあんぞこれ。姉貴もちゃんと掃除してくれよ」

マスクをしながらも咳き込む榛名。軍服の上からエプロンに三角巾、マスクに箒ほうきという姿はある意味滑稽こっけいに見えるが、これが帝国艦魂の年末行事なのだから驚きだ。

「ああ、すまん。掃除は比叡ひえいに任せていたからな」
「そっか・・・」

金剛の言葉に、榛名は顔を伏せた。

この一ヶ月前に行われた第三次ソロモン海戦で、比叡と霧島きりしま、金剛姉妹の次女と四女が命を落としていた。

もう会えない二人に、榛名の表情が曇る。霧島のキラキラとした瞳や、比叡の優しい笑顔が、忘れられない。

思い出すだけで、泣きそうになる。

そんな彼女の肩を、金剛がそっと叩いた。顔を上げると、そこには頼れる姉が立っていた。

「榛名。志を強く持て。比叡と霧島の為にも、この戦争は何としても勝たねばならん。だから、泣くな」

「あ、姉貴・・・ッ！」

泣くなと言われて、泣き止むなんてできるはずもない。

榛名は金剛の胸に飛び込み、すすり泣く。金剛はそんな妹を、そつと抱き締めた。無言で、ただ彼女の辛さや悲しみを、そつと受け止めた。

どれだけの時間そうしていただろうか。

「金剛さん、お手伝いに来ましたよお」

そう言って入って来たのは大和^{やまと}。その後ろには武蔵^{むさし}、長門^{ながと}、陸奥^{むつ}、伊勢^{いせ}などが揃っていた。

そんな突然の来訪者に、榛名は顔を真っ赤にして慌てて金剛から離れた。神業的な神速のおかげで大和が入る直前に離れられたが、顔は真っ赤なままだ。

「榛名さんもいらしてたんですね・・・って、顔が赤いですけど、大丈夫ですか？」

「大丈夫だッ！」

「ひいッ!？」

「あら榛名。一体姉妹揃って何をしていたのかしら？」

「何もしていないッ！」

顔を真っ赤にしながら怒鳴る榛名に、長門はニヤニヤと笑いながら近づく。

「ダメよ榛名。姉妹はそういうのはダメなのよ？」

「何の話だぁッ！」

榛名は顔を真っ赤にしながらずち切れ、手に持っていた箒を振り回して長門を追い払おうとする。

狭い部屋の中、そんな大暴れする榛名に大和、陸奥、伊勢は悲鳴を、長門は笑い声を、金剛と榛名は怒号を放ち、武蔵は無言だった。だが、それは突然終わりを告げた。怒号を放ちながら榛名は箒を振り回していたが、柄の先が《帝国海軍魂》と達筆で描かれた額縁

に直撃。額縁は見事に落下してガシャアンツと激しい音を立てた。その音に、榛名は動きを停止。サーツと血の気が引く。

「あ、姉貴？」

振り返るとそこには頭を抱えながらも肩や拳がピクピクと震え、背後からすさまじい怒気を噴出させる金剛が立っていた。

「榛名貴様あツ！ 齒食い縛れえツ！」

「ひいひいひいッ！」

「総員金剛を押さえつけてえッ！」

長門の号令で大和達は慌てて金剛を押さえつけ、何とか事態は終結した。

結局全員で榛名が破壊した額縁を片付ける事になった。榛名は「すまねえ・・・」と何度も謝ったが、長門も悪いという観点から許された。

大和と陸奥が箒、伊勢と長門、榛名が額縁自体の片付け、金剛は指示、そして武蔵はぼーっと床を眺めていた。と、

「・・・？」

先程まで塵一つ落ちていなかった床に、ガラス片とは別に何か落ちていた。それは何かの紙だった。何気なく拾い上げると何の変哲もない紙。だが裏返してみるとその正体がわかった。

「・・・写真？」

それは一枚の写真であつた。

どこかの軍艦の甲板で撮影された写真には中央に二人の少女が写っていた。どちらも日本人とはまるで違う西洋人のような金髪碧眼。陸奥と同じくらいの年齢の少女は長い金髪をポニーテールにした無表情。そんな彼女の腕にしがみ付いて照れたような笑みを浮かべる大和くらいの長髪の少女。まるで仲の良い姉妹のように見える。

「・・・これって」

「うん？ 何やそれ？」

伊勢が横からその写真を覗き込んだ。と、

「ああ、懐かしいなあ」

伊勢は写真を取ると懐かしそうな笑みを浮かべる。そんな彼女の声に片付けを終えたばかりの大和達も近づいて来た。

「伊勢さん？ 何ですかそれ？ 写真？」

「あら、これって・・・」

「あ・・・」

「うん？ 何だそれは？ って、なあッ!？」

何かに気づいた長門と陸奥、不思議そうに首を傾げる大和、なぜか顔を真っ赤にさせる金剛。様々な反応だ。

「うわあ、外人の艦魂さんですか？ あれ？ でも日本海軍の軍服ですよこれ」

大和は首を傾げる。そんな彼女に、長門はにつこりと微笑む。

「昔の海軍は外国製の軍艦を輸入して編成してたのよ。だから、昔の日本海軍はイギリス人もアメリカ人もドイツ人もイタリア人も混ざった組織だったのよ」

「そうなんですか で、これは一体誰なんですか？」

「ああ、これは金剛の昔の写真よ。そうね、大正時代くらいかしら？」

「へえ、金剛さんにもこんな少女の時代があったんですね」

「どういう意味だ？」

睨む金剛に愛想笑いし、大和は再び物珍しそうに写真を見る。何度見ても自分達黒髪黒瞳の日本人とはまるで違う金髪碧眼の少女二人が写る写真は新鮮に見える。

「それにしても金剛さんって昔はポニーテールだったんですね。しかも無表情で写ってるなんて、もう少し笑った方が良かったですのに。ほら、こっちの女の子みたいに。で、この笑顔のかわいい方は誰ですか？」

笑顔で振り返ると、そこには・・・

「くくく・・・ッ!」 長門。

「ぶぶぶ・・・ッ!」 陸奥。

「フフフ・・・ッ!」 伊勢。

「ヒヒヒ・・・ッ！」榛名。

「・・・ッ！ な、なぜ笑う必要があるッ！？」金剛。

「・・・」武蔵。

なぜか必死に笑いを堪えている長門達と、怒鳴る金剛。武蔵は無視しても、この反応は何やら変だ。何か自分が変な事を言っただろうかと、大和は自分の発言を頭の中で反芻する。はんすうと、

「大和。あんた誤解してるわよ？」

「誤解？ どういう意味ですか長門さん？」

いまだに笑いを堪えながら、長門は写真を手に取り少女を指差す。その指先が捉えたのは、少女に抱きついて照れ笑いをしたかわいい少女

「こっちが金剛よ」

「ええええええええッ！？」

「・・・ッ！？」

「どういう意味だその反応はッ！？」

めちやくちや驚く大和。その隣では武蔵も瞳を大きく見開いて珍しくおろおろしている。彼女も相当驚いているらしい。そんな二人に顔を真っ赤にして怒鳴る金剛と、そんな反応を見てついに笑いが堪えられなくなったのか大笑いする長門達。

「だ、黙れえッ！ 笑うなッ！」

金剛は竹刀をバンバンツと床に何度も叩き付けるが、その顔は耳まで真っ赤。まったくもって説得力がない。

一方、大和は驚きと共に混乱していた。

「こ、金剛さん？ このかわいらしい方が？ この天使のような笑顔をされた方が？ こんな世の中の汚いものにまるで触れた事もないような天真爛漫な方が？」

「大和。貴様とは一度徹底的に話し合う必要があるな」

「ああ、それは世の中の汚いものに触れる前の頃の金剛だから。金剛も大正時代は今の^{大和}みたいにすっごく優しくてかわいい子だったのよ」

長門の説明に、大和はガラガラと金剛の人物像が崩壊した。

日本海軍の鬼將軍にして鬼の金剛と恐れられるあの恐怖の象徴に、こんな時代があったなんて、信じられないし・・・信じたくもなかった。

「ああ・・・金剛さんって・・・あれ？　どういう人？　あれ？

っていうか、金剛さんって誰？」

「お、おいヤバイッ！　大和が混乱しやがったッ！」

「あかんってッ！　やっぱ金剛はんの少女時代は知らん奴から見たら悪夢でしかないんや！」

「どういう意味だ伊勢ッ！？」

そんな感じで混乱のあまりおはじきをドロップと間違えて食べようとすると大和を長門達が慌てて止め、不安定になった彼女の精神を安定させる。そんな皆の反応を見て金剛は背を向けて仁王立ちしている。ただ、その顔はありえないくらいに真っ赤だ。ちなみに武蔵はあまりにも衝撃的過ぎたらしく、気絶していた。

それから半時後・・・

「うう、金剛さん・・・どこで道を誤られたんですかあ？」

「誤ってなどおらんッ！　これが正しい道だッ！」

目を背けたい現実泣き崩れる大和と、そんな彼女を怒鳴りつける金剛。彼女の昔を知っている長門達は笑いを堪えるのに必死だ。だが、そんな中たった一人だけじっと写真を見詰める者がいた武蔵だ。

「・・・じゃあ、こっちは誰？」

武蔵が指差したのは金剛（天真爛漫少女時代）が笑顔で抱きついているポニーテールの少女。無表情なその顔はどことなく武蔵に似ている。

武蔵の問いに、先程まで顔を真っ赤にして怒鳴っていた金剛がスツと目を細め、真剣な顔つきになる。長門達も、自然と姿勢を正した。そんな不思議な空間に大和と武蔵という新入り組みは首を傾げる。

武蔵から写真を取ると、金剛は一度その謎の少女を見詰め、小さく微笑んだ。そんな彼女の反応に驚く大和と武蔵に、金剛は真剣な口調で言った。

「このお方は大日本帝国をロシアの脅威から守り抜き、我が帝国海軍の永遠の英雄にして終身名誉司令長官であらせられる 戦艦『

三笠^{みかさ}』殿だ」

「こ、この人があの《英雄王》三笠様なんですかッ!？」

「・・・これが」

大日本帝国海軍 いや、大日本帝国国民なら誰もが知っている日本海軍の永遠の英雄艦。

日露戦争の際、強敵ロシアに劣勢な戦力でありながら猛訓練を行って真正面から戦い抜いた連合艦隊。

連合艦隊司令長官東郷平八郎^{とうこうへいはちろう}元帥を乗せ、一〇七隻^{にん}の仲間と共に日本海において強敵ロシアバルチック艦隊を迎え撃ち、自らの艦体^{からだ}に敵の砲弾を受け血まみれになりながらも決して諦めず見事な指揮をし続け、見事バルチック艦隊を撃滅。日本を勝利に導いた英雄。それが戦艦『三笠』だ。

「知っていますッ! 三笠様の英雄伝ッ! 五省^{ごせい}を人よりも早く艦魂達に伝授し、あの東郷元帥に助言をし、日本海海戦前には水兵も下士官も関係なく参加全艦魂を集めて敵艦の見分け方を教え、日本海海戦では敵の砲弾を受けて血まみれになりながらも己が志を貫いて敵艦隊を砲撃し続け、同海戦では射手や装填手が戦死した速射砲を使い連合艦隊唯一自らの手で敵艦を砲撃撃沈した、私達大日本帝国海軍の永遠の英雄王ですッ!」

大和は感動していた。

どんな艦魂であつても、戦艦『三笠』を知らない者はいない。そして、そんな『三笠』の艦魂の英雄伝や武勇伝は本や口伝で今も若き艦魂達に受け継がれている、まさに永遠の英雄。それが戦艦『三笠』であつた。

「今は記念艦として祖国を見守り続けている伝説の戦士・・・その

お姿を見れて感激ですッ！」

大和はジッと写真の中の三笠を見詰める。想像していたのは金剛のような鬼指揮官だったのだが、実際はどこか武蔵に似た感じの艦魂であった。だが、その英雄伝を知る彼女にとってはそんな事は些細な事でしかない。それほどまでに戦艦『三笠』の艦魂とは偉大な方なのだ。

「せやなあ。確かに英雄扱いされてるけど・・・実際は結構無茶苦茶な人だったで？　今伝えられている英雄は結構誇張されたものが多いしな」

そう言ったのは伊勢。彼女は『三笠』が記念艦として引退する五年前に竣工したので、彼女を知っている数少ない存在だ。

「え？　実際の三笠様ってどんな方だったんですか？」

「うーん、三笠様は結構武蔵に似てたわよ？　ううん。むしろ武蔵以上にわがままな艦魂^{ひと}だったわね」

長門の言葉に大和は驚いて後ろにいる妹を見る。視線が合った瞬間、「・・・何？」と睨まれたが、それ以上に大和は驚いていた。

「あ、あの伝説の英雄王が、武蔵に似ていたのですか？　それも、武蔵以上に厄介と？」

「せやなあ。いつも無口無表情。必要最低限な事しか言わないクールな方だったで。せやけど、時々サボったり会議中に寝てたり、結構マイペースだったで？」

「あ、あの三笠様がッ!？」

「そうよね。それに」

長門はそこまで言うと、スッと目を細めて微笑み、大和と武蔵を見詰める。その笑顔には優しい気持ちが入り込んでいた。

「不器用でも、いつもいつも必死になって恋に生きた　普通の女の子だったわ」

長門の言葉に大和は驚きのあまり声も出なかった。

あの英雄王が恋に生きていたなんて、そんな事どんな本にも書かれていなかったし、信じられなかった。三笠と言えば日本海軍の英

雄王。そんな人は自分みたいに恋などせず仕事に真面目な人だと思
っていた。

「三笠様はね、本当は誰よりも心の弱い方だったのよ。そんな彼女
を奮い立たせ、必死に応援して支え続けたある少年士官の話は、今
じゃあまり知られてないわ」

「少年士官、ですか？」

「うん。三笠様の話を聞く限りどこか長谷川君に似てたみたいね。
それも、三笠様の他にもお姉さんの敷島様しきしまや三景艦いつの一人である巖
島様くしまや多くの艦魂に好かれてたらしくてね、三笠様はいつも必死だ
ったわよ」

「・・・そのお気持ち、すぐわかります」

大和は三笠の境遇を自分と重ねてみた。大好きな人が他にも大勢
の艦魂おんなのこに好かれている状況は、過酷以外なにもものでもない。

「ったく、あの三笠様を振り回すなんてとんだ犯罪者だな。その男
は」

「まあまあ榛名さん。三笠様も女の子だったんですよ」
不機嫌そうな榛名と陸奥がなだめる。

その時、大和は今までずっと黙って写真を見詰めていた金剛を見
た。その瞳にはいつもの鋭さはなく、どこか懐かしそうな、幸せそ
うに感じられた。

「三笠殿は・・・私にとっては姉のようなお方だった」

「金剛さんの、お姉さん、ですか？」

「もちろん、敷島殿や朝日殿あさひ、富士殿ふじや出雲殿いずもも尊敬はしている。
だが、やはり私は三笠殿を最も尊敬し、信賴している」

「そうなんですか・・・」

ずっと、金剛が振り向いた。その表情はいつもの彼女らしい鋭さ
はなく、柔らかな、優しい光に包まれていた。

「私と三笠殿の出会いはある蝉時雨の夏の日だった」

積乱雲がもくもくと積み重なり、蝉が生命の雄たけびを必死に上

げている夏のある日。

蒼い海と空に白い波と雲。まぶしいくらいに輝く太陽の下、竣工したばかりの巡洋戦艦『金剛』が遠路はるばる故郷イギリスから本当の故郷である日本　佐世保に來航した。

佐世保軍港には日露戦争で活躍した多くの戦艦や、その後生まれ、た戦艦などがいまだ現役で存在し停泊していた。その中に現れた『金剛』はそのどれよりも巨大であった。

新鋭艦『金剛』の甲板には、新たな仲間を迎えようと大勢の艦魂達が集まっていた。

「新しい仲間、金剛って一体どんな子なのかしらね？」

そう言ったのは長い金髪に碧眼の二〇代手前くらいの少女。彼女の名は敷島。敷島型戦艦一番艦、戦艦『敷島』の艦魂だ。日本海海戦にも参加した英雄の一人だ。

「さあ？　結構普通の子なんじゃないか？　まあ、どんな子であれあたいは大歓迎さ」

笑顔で言うのはセミロングの金髪に碧眼をした活発そうな少女。

敷島の妹にして敷島型戦艦二番艦、戦艦『朝日』の艦魂だ。彼女も日本海海戦に参加している。ちなみに彼女は現在の連合艦隊旗艦、つまり日本海軍艦魂のトップに君臨する艦魂だ。

「私は妹みたいな子大歓迎だよ！　かわいいかわいい私の妹ちゃん！」

「無理よ姉さん。姉さん自体が妹っぽい幼い外見なんだから」

「な、何ですってえッ！？　怒っちゃうぞッ！　プンプン！」

「それが幼いのよ」

顔を真っ赤にして怒る金色の髪をツインテールで纏めた碧眼の少女に対し、冷静な同じく金色の髪をサイドテールで纏めた碧眼少女。二人は出雲型装甲巡洋艦、一番艦『出雲』の艦魂と二番艦『磐手』の艦魂。どちらが姉なのかわからないほど姉が子供っぽく妹がしっかりした不思議な姉妹だ。

「少し落ち着いてはどうだ出雲殿。先輩としてしっかりしてください」

い」

そう言ったのは長い黒髪に美しい黒瞳の日本人らしい姿をした少女。彼女の名は薩摩^{さつま}。薩摩型戦艦一番艦、戦艦『薩摩』の艦魂だ。
「まあまあ姉さん。みんなウキウキしてるんだから、あんまり水を差さないの」

そう笑顔で言うのは薩摩と同じく黒い髪をショートヘアで纏め、耳の少し上に白鳥の羽をあしらった髪留めをした黒髪の少女。薩摩の妹で二番艦『安芸^{あき}』の艦魂だ。二人は日露戦争後に生まれた戦後組だ。

「ああ、早く抱き締めたいわ金剛ちゃん。この私のくふくよかな胸でく包み込みたいわあ」

「姉さん。頼むから暴走はしないでね？ いきなり問題はごめんよ？」

「うらやましい・・・」

三人とも金色の長い髪に碧眼という出で立ちだが、そのスタイルはバラバラだ。のほほんとした雰囲気を纏った殺人級に大きな胸を持つ少女は香取型戦艦一番艦、戦艦『香取』の艦魂。そんな姉を見て疲れたようにため息するのは香取姉妹の《しっかりした方》と呼ばれる妹にして姉には全然負けるが連合艦隊では結構大きな胸を持つ二番艦『鹿島^{かしま}』の艦魂。そして、自分の全然ないペツタンコな胸を触って暗くなった気弱そうな少女。この子が現在連合艦隊最古参の戦艦にして現在は練習艦となった元富士型戦艦一番艦、練習艦『富士』の艦魂だ。もちろん日露戦争には参加している。

かつて富士の妹にして日露戦争中に機雷に接触して戦死した戦艦『八島^{やしま}』の艦魂は香取にも負けないくらいに大きな胸にくびれた腰スラリとした長い身長を持っていた。その為姉なのに幼児体形の富士とモデルのようなスタイルの八島は《富士平野八島大山》と呼ばれていた。富士にとっては嫌な記憶であり、大好きだった妹との思い出の一つだ。

ちなみに敷島型戦艦三番艦、戦艦『初瀬^{はつせ}』も日露戦争中に機雷に

接触して沈没した。

そんなすでお祭りムードで新入りの登場を待つ艦魂達の中、一人だけ全く違った雰囲気を纏った艦魂がいた。

腰まで伸びた長く美しい金色のポニーテールを風に揺らし、じつと海の蒼のような美しい碧眼で金剛が現れるであろう甲板を見詰めて一言も口を利かず微動だしない無表情少女。

彼女こそ連合艦隊旗艦が朝日に代わっても事実上艦魂達の頂点に君臨する司令長官にして、日露戦争では連合艦隊を見事勝利に導いた英雄王 戦艦『三笠』の艦魂であった。

外見は今でこそ十六歳くらいの幼さの中にも大人びた雰囲気纏っているが、日露戦争の際は十二、三歳くらいの外見で戦ったのだ。血にまみれ、吐血を吐き、激痛に耐えながらもその碧眼は敵艦隊を逃がす事はなく、必死に戦った。

日露戦争でロシア精鋭艦隊であるバルチック艦隊を葬った指揮官である三笠は今では終身名誉司令長官という栄誉を受け、日本艦魂史上唯一元帥の称号を持つ（太平洋戦争までも含め元帥職の艦魂は彼女一人だけ）、まさに真の英雄王だ。

そんな多くの艦魂達に崇拜される三笠はどこか神秘的な雰囲気を纏い、腰に下げた二本の軍刀に片手をそつと添え、ふと蒼い空を見上げた。

「三笠？ どうしたのよ？」

隣に立つ姉である敷島が不思議そうに問うと、三笠は何事もなかったように再び甲板を見詰める。その碧眼は、一体何を見詰めているのだろうか？

そして、しばし多くの艦魂達が今か今かと新たな仲間の登場をウキウキしながら待っていると、突如目の前の甲板が光りだした。拡散していた光が一ヶ所に集中して行き、圧縮され、それはだんだんと人の形に変化する。そして、目を覆うような強烈な光が弾けた刹那、光が消えた甲板の上に少女が一人立っていた。

腰まで伸びた長い金髪に碧眼という出で立ちは、彼女がイギリス

出身の艦魂であると指し示していた。

外見は十二、三歳くらいの幼い少女。だが、その正体は日本海軍の期待の新生にして連合艦隊最大最強の戦艦　戦艦『金剛』の艦魂だ。

少女はわざわざ自分を待っていてくれた初めて会う先輩達に向かってカツと踵を揃え、ビシツと見事な、美しい敬礼をする。クリツとした碧眼は、汚れを知らない純粹そのもの。

「初めましてッ！　大日本帝国海軍所属、金剛型巡洋戦艦一番艦　戦艦『金剛』艦魂ですッ！　一日でも早く皇国の為に己が力を振るえるように。そして、立派な帝国海軍軍人になれるよう粉骨碎身の努力をしていく所存であります故、まだまだ世間知らずな未熟者ではありますが、よろしくお願い申し上げますッ！」

力強くというよりは元氣良く、しかしどこか緊張したような表情でそう言った少女　金剛。そんな彼女の見事なあいさつの刹那、爆発のような歓声が沸いた。集まった多くの艦魂達が新たな仲間への祝福の声を上げる。紙吹雪が舞い、金剛の金色の髪に数枚乗った。

大歓迎を受ける金剛だったが、いきなり初対面の相手にそんな大歓迎を受けたせいけ、ちよっぴり怯えている。そんな彼女にそつと歩み寄ったのは敷島。

敷島はすつと手を伸ばし、自分と同じ金剛の美しい金髪に触れ、そつと紙吹雪を落とす。

「そんなに緊張しなくていいわよ金剛。みんな、あなたが来るのを楽しみにしてたのよ？　ちよつと興奮してるけど、みんないい人達だから。安心して」

「あ、あなたは・・・？」

「あ、ごめんなさい。そういえばまだ名乗ってなかったわね。私は敷島型戦艦一番艦、戦艦『敷島』の艦魂よ。見ての通り、あなたと同じイギリス出身よ」

そつ名乗ると、敷島は優しく金剛に微笑む。その笑顔に、幾分か

金剛の表情が和らぐ。そこへ朝日が近寄る。

「お前が金剛か？ うん。いい目をしている。こりやいずれ大物になるな」

イタズラっぽく笑う朝日に、金剛はスツと半歩下がる。そんな彼女の反応に朝日はシヨックを受け、敷島は苦笑いした。

「こら朝日。金剛は初対面なんだから、あんまり怖がらせてはダメよ？」

「あ、あたいは別に怖がらせてなんていないぞ」

「こ、怖くありません！」

自分に向かつてまるで違う反応をする二人を見て、敷島はおかしそうにクスクスと口に手を当てて笑う。

「わ、笑うなんて姉上ひどいな」

「ごめんなさい。あ、紹介するわね金剛。この子は私の妹で敷島型戦艦二番艦、戦艦『朝日』の艦魂よ」

敷島に紹介された朝日は腕を組み仁王立ちで金剛と対峙する。

「あたいの名は朝日だ。それでも一応現連合艦隊旗艦だ。よろしく頼むぜ金剛」

朝日の言葉に金剛は驚愕すると再びビシツと姿勢を正す。目の前にいるのは連合艦隊旗艦。人間で言うなら連合艦隊司令長官とも言うべき最高司令官だ。姿勢を正すのは当然の対応だ。だが、そんな金剛の反応に朝日はニツと皆から《姉御》と呼ばれるような頼もしい笑みを浮かべる。

「そう畏まるな^{かしこ}つて。連合艦隊旗艦^{かしこ}つたつてあたいは飾りみたいなもんだ。人間が勝手にあたいを旗艦に選んだだけの事。本当の司令長官は別にいるさ」

「と、言いますと？」

金剛が聞き返した刹那、ふわりと三人の中に何者かが入って来た。長い金色の髪を後ろで結び、人形のように整った顔はまだ幼さが多い。だが、その身に纏うオーラは百戦錬磨の戦士そのもの。幾多の戦いの生き抜いてきた、本物の戦士。そして、どのような敵をも策

を仕掛けて勝利する策士。全てを兼ね備えた最強の指揮官とは、彼女の事を示すのだろう。

金剛の前に立ったその少女は、じっとその碧眼で金剛を見詰める。金剛もいきなり現れた最強の艦魂と確信できるオーラを纏った彼女を見詰め返す。

一瞬の沈黙の後、少女が口を開く。

「・・・敷島型戦艦四番艦、戦艦『三笠』艦魂。よろしく」

何の感情も込もっていない、セリフだけの自己紹介。三笠が金剛に言ったのはたったそれだけだった。だがそれは、金剛を驚かせるには十分過ぎる威力であった。

「あ、あなたが英雄王三笠殿、ですか・・・？」

興奮を抑え、声を震わせながらキラキラとした瞳で三笠を見詰める金剛。だが、そんな彼女の放った言葉に、三笠は首を横にフルフルと振る。

「・・・違う。私は英雄なんかじゃない」

「いいえ。三笠殿といえば英雄中の英雄。イギリスで少しの間だけ一緒にいた艦魂も三笠殿を尊敬していました」

感動して嬉しそうに話す金剛。だが、やはり三笠は首を横に振る。

「・・・私は英雄なんかじゃない。バルチック艦隊に勝てたのは、命懸けで戦った艦魂達と、^{なかま}厳しい訓練に耐えて見事な戦闘を繰り広げた人間達。私は、そんな一人に過ぎない」

「しかし三笠様は」

「やめなさい金剛」

興奮してさらに話そうとする金剛を、敷島がそつと制止する。

「敷島殿？」

「この子はね、あんまり英雄とか呼ばれたくないのよ。自分はその戦いで戦った一将兵に過ぎないって、思ってるから」

「し、しかし」

「そつだぞ金剛。実際にあたいた達を操艦して砲撃を行ったのは人間達だ。見事な指揮で艦隊を組み、敵を挟撃して殲滅したのは東郷元

帥だ。あたい達は、ただ必死に戦った、名もない将兵なんだよ」

そう言って朝日はニツと笑う。その屈託のない笑みに、金剛は引き下がった。

確かに彼女達の言うとおりだ。艦魂は、自分の艦を動かす事はできない。いつもいつも傍観者でしかない。被害を受ければ傷つくし、沈没すれば死ぬ。だけど、その運命を自分で変える事はできない。あの戦いで自分達を勝利に導いたのは、人間達だ。自分達艦魂は、そんな彼らを信じて、ただひたすらに敵艦隊を睨んでいただけ。それは、敵も同じ。

艦魂は、己が大砲を使って、敵を攻撃する事はできない。だが、それをやってのけたのが、三笠だった。その話もまた、英雄伝の一つだ。

しかし、金剛はそれ以上何も言わなかった。人が嫌な事は言わない。当然の事だ。

「す、すみません・・・」

ペコリを頭を垂れて謝る金剛。そんな彼女に敷島がそつと声を掛けようと前に出る。が、それは三笠に制された。

「三笠？」

「・・・顔を上げて」

そつと、小さくも凜とした声に金剛は顔を上げる。するとそこには、無表情でじつと自分を見詰める三笠が立っていた。日の光を背中から受ける彼女の金色の髪は、キラキラと輝いて、美しい。

スツと三笠の手が伸び、そつと金剛の頬に当てられ、撫でられる。その温かくて柔らかい優しい感触に、金剛は安心した。

イギリスを出発して以来 いや、生まれて以来感じた事のない温かさだった。

三笠はそつと金剛の頬を撫でる。その時、フツと彼女の口もちに小さな笑みが浮かんだ。驚く金剛に、三笠はそつと言葉を掛ける。
「・・・お帰りなさい。金剛」

その言葉に、金剛の瞳は大きく見開かれ、涙が浮かび、頬を流れ

る。

お帰りなさい。

それは家に帰って来た人を出迎える為の言葉。

そして、ここは自分の故郷なのだ。生まれ故郷ではないが、これから自分が暮らす、新しい故郷　だから、嬉しかった。

お帰りと言ってもらえて。

もう自分は、一人じゃないって・・・

「うう・・・ひぐう・・・」

ついに本格的に泣き始めた金剛に、三笠は驚いておろおろとする。バルチック艦隊をも撃滅した彼女であっても、泣いた女の子を目の前にしてはどうしようもない。

敷島と朝日も慌てて泣き止まそうとするが、金剛は別に怖いとかで泣いているのではない。むしろその逆。嬉しくて泣いているのだ。こればかりは二人にも泣き止まず事はできない。と、

「ああ〜ん、泣かないで金剛ちゃん。泣くなら私の胸で〜思う存分泣いてね〜」

「むぐ・・・ツ！？」

突如現れた香取は金剛をギュツと抱き締め、その殺人級に大きな胸に顔を埋める。金剛はもう温かいやら柔らかいやら息ができないやら恥ずかしいやらで大混乱。ジタバタと手足をばたつかせるしかない。

「ちよつと姉さん！　金剛を放しなさいよおツ！　窒息しちゃうわよツ！」

妹の鹿島が慌てて香取の肩と金剛の肩を掴んで引き離そうとする。彼女はあくまで人命救助の為に行動しているのだ。だが、そんな必死になる妹を見て香取は優しく笑う。

「あらあ〜鹿島やきもち〜？　お姉ちゃんを〜取られちゃうのが〜嫌なのお〜？　嬉しいなあ〜」

「なあッ！？　ち、違っわよ私は人命救助の為に　むごお・・・ッ！？」

「ああ、かわいいかわいい私の鹿島ちゃん」

「・・・ッ!?　・・・ッ!?」

金剛と鹿島を捕まえて兵器レベルの胸に包み込む香取。その光景は微笑ましいのだが、掴まった二人は必死だ。

「香取殿。そろそろ二人を解放しないと本当に窒息します」

そう言ったのは薩摩。連合艦隊一の剣豪にして争い事の仲裁者だ。だがそんな薩摩の言葉にも香取は止まらない。

「ごめんね薩摩、今私のお胸は塞がってるの。だからちょっと待っててね」

「い、いえ私は注意をして」

「も、せっかちさんね。じゃあ鹿島はここまでね」

「プハアッ!　し、死ぬかと思った・・・ッ!」

顔を真っ赤にして慌てて酸素を補給する鹿島。金剛はまだ解放はされず。

「さあ薩摩。かわいがってあげるね」

「い、いや私は遠慮して　むう・・・ッ!?」

「いやあ、薩摩ちゃんはかわいいなあ」

「あう・・・香取殿・・・」

「・・・」

「あの、そろそろ金剛を本当に助けませんか?　ピクリとも動いていませんが」

磐手の言葉に敷島と朝日がハツとして見ると、金剛の手足はだらんと垂れてピクリとも動かなくなっていた。

「か、香取ッ!　金剛を放せッ!　ほんとにヤバイって!」

「あらあ、朝日様もせっかちですねえ。いいですよあ。どうぞこちらへ」

「ち、違っッ!　あ、あたいは　ごふう・・・ッ!?」

「・・・」

「こ、金剛ッ!?　だ、誰か衛生兵を呼んでッ!　早くうッ!」

解放されたがピクリとも動かない金剛に敷島が慌てて助けを呼ぶ。

そんな金剛の身代わりとなってしまった朝日は香取の常識外れに大きな胸に顔を埋められて必死もがく。だがなぜか薩摩だけは抵抗はしなかった。

それはそうだろう。薩摩は香取が大好きなことから。クールな印象の薩摩は、いまだに香取と一緒に布団で寝ているほどの甘えん坊だったりする。

「あーあ、もう無茶苦茶だねえ」

「姉さんちよつと嬉しそうじゃない？ まったくダメな姉さんね」

出雲と安芸は苦笑いしながらその惨事（？）を見詰める。その横では律儀にも富士が「え、衛生兵さ〜んツ！ 衛生兵さ〜んツ！」と助けを呼んでいる。真面目な彼女らしい。

そんな感じで、金剛の第一次歓迎会はすさまじい展開となって終わった。

金剛が目を覚めたのはそれから一時間後の事。後に彼女はあの時の事を「美しい川の向こうに胸の大きな美女がたくさん私を呼んでいたが、絶対に危険だと思って引き返したら助かった」と、生死の境をさ迷ったと明かしたのであった。

とにかく、はるばる日本までやって来た新たな仲間である金剛の登場は、連合艦隊の艦魂達の士気を大いに高めた。

これが、金剛と三笠での出会いであった・・・

金剛が連合艦隊に編入されて二週間が過ぎた。

海軍内では次期連合艦隊旗艦を『金剛』にする事が決定されていたが、艦魂達にとってはあまり関係のない事であった。何せ現連合艦隊旗艦である朝日より、実質艦魂達を指揮しているのは三笠だからだ。

連合艦隊艦魂司令部は司令長官を三笠、参謀長を敷島、前任参謀を朝日と薩摩、その他主に戦艦の艦魂で編制されている。

そんな人間社会とはまるで違った組織形態を持つ艦魂達を指揮する三笠は、日々仕事があるが自分がしなくてはならない仕事は終わ

らせるが、司令部の艦魂なら誰でもいいような簡単な仕事は放棄していた。その為いつも敷島が激怒しながら嫌がる朝日と苦笑いする薩摩と一緒に仕事をするという日々であった。

英雄王と呼ばれた三笠の伝説とはまるで違う一面を知った金剛だったが、三笠に対する信頼は揺るぐ事はなかった。

金剛はあの出会いから三笠にすっかり懐き、いつもいつも彼女の後ろをメモを片手に追っかけていた。そして暇があれば司令部の掃除や書類の整理などの雑務を積極的に行った。

元々真面目なのだが、それ以上に皆の役に立ちたいという気持ちが強いのだ。

その日も金剛は三笠の後を追っかけていたが、会議がある為に別れた。まだ金剛は三笠から参謀には編入されていないのだ。ちょっぴり悲しいが、いつかきつと呼ばれる事を夢見て金剛は『三笠』の一室、連合艦隊艦魂司令部本部に入った。部屋は結構広いのだが、日々の激務の影響で毎日毎日金剛が掃除をしても次の日には書類や資料が床に散らばり本棚はゴチャゴチャ。休憩の際に使われた食器も片付いていない。

忙しいのはわかるが、基本的に女の子なんだから少しはしっかりしてもらいたいと金剛は内心思っていたが、口にはしない。その分だけ皆ががんばっている証拠なのだから。

金剛は早速掃除に取り掛かる。書類は機密、重要、通常など幾つも分け、さらにその中であういうえお順に揃える。これで取りやすくなる。

食器は片付けてちゃんと洗い、本棚にはしっかりと振られている番号順に並べ、ゴミを片付け、雑巾掛けまでも行い、隙間なんかの埃も取り除く。徹底した清掃だ。

そんな感じで金剛が窓の掃除をしていると会議を終えた敷島、朝日、香取、鹿島、薩摩、安芸の六人が帰って来た。

「お帰りなさい皆さん」

「ああ、金剛。ごめんねいつもいつも」

「いえ、お役に立てるのなら私も嬉しいです。お茶でも飲みますか？」

「ええ、お願い」

敷島の返事を受け、金剛は早速お茶の用意をする。ちなみにこの時代はまだイギリス人が多い社会だったので、お茶といえば紅茶を指す。

「金剛ちゃん。ここに置いてあったクッキーどこ？」

「あ、そっちの棚に布を掛けて置いてありますよ」

「ふえー？ あ、あったあ！ クッキー！」

まるで子供のように嬉しそうな声を上げて香取はクッキーを取り出すと食べる。

「うーん おいしいわぁ」

「姉さん。行儀悪いから座って食べてよ。あとクッキーみたいな零れるものは皿の上で食べて。何度も言ってるでしょ？」

「お姉さん、難しい事わかんない。鹿島は頭いいね」

「姉さんが頭悪いのよ。まったく、よくそれで司令部参謀なんて務まるわね」

頭を抱えて姉のアホさに呆れる鹿島の肩を、安芸がポンと叩いた。

「まあまあ鹿島。香取の天然は今に始まった事じゃないじゃない」

「そっなのよねえ・・・」

「安芸ひどい。私は天然じゃないぞぉ」

安芸に反論する香取だが、ここにいる彼女以外の全員が安芸の意見には同意見であった。香取が天然ではないのなら、彼女のキャラをどう理解すればいいかわからない。

金剛はそんなやり取りを聞きながらテキパキと紅茶の用意を終え、ティーカップに紅茶を淹れて皆に配り、ティーポットを机の真ん中に置く。

「金剛が淹れた紅茶はおいしいな。あたいは大好きだ」

「そっね。私も好きよ」

「あ、ありがとうございます」

朝日と敷島にほめられ、金剛は嬉しそうにはにかむ。香取、鹿島、薩摩、安芸もほめてくれた。ちなみにこの紅茶の淹れ方は薩摩に教えてもらった。才色兼備。薩摩はまさにその言葉がぴったりの艦魂であった。まあ、香取に甘えてしまうのは彼女の数少ない弱点と言えよう。

金剛はふと一つ残ったティーカップを見詰める。自分のではない。これは

敷島殿。三笠殿はどこへ行かれたのですか？」

まだ帰って来ない三笠の居場所を問うと、敷島は小さく微笑んだ。「きつと甲板ね。またいつものように陸を眺めているんですよ？」

「陸を？ なぜですか？」

金剛が不思議そうに問うと、紅茶を飲み終えた朝日がニツと笑う。「あいつの帰りを待ってるんだよ。三笠は」

「あいつ？」

「そういえば姉上、そろそろ帰って来るんじゃないか？」

「そういえばそうね。ああ、私も早くお会いしたい」

敷島と朝日は嬉しそうに会話に華を咲かせるが、まるでわからない金剛は首を傾げるばかり。そんな彼に香取がニヤハハと笑いながら近づく。

「三笠さんも、敷島さんも朝日さんも、大好きな人の帰りを待ってるの〜」

「大好きな人？ 誰ですか？」

「あなたも、そのうち会えるわよ。とってもいい人だから」

そこまで言って香取は金剛を抱き締めた。胸に呼吸を封じられてもがく金剛を鹿島と薩摩が止めに掛かるが、例のように返り討ちに遭ってしまった。敷島と朝日は《大好きな人》の話題に夢中で気づいていない。

そんな騒ぎの中に入って来た出雲と磐手と数人の艦魂達。出雲と安芸は楽しそうに笑い、磐手は疲れたようにため息をし、残る艦魂達は慌てて香取の暴走を止めに入る。

騒がしい部屋をそつと金剛は抜け出すと、三笠を求めて走り出した。

香取が言っていた三笠の好きな人。それが気になったのだ。

金剛は甲板を目指して階段を駆け上がった。

その頃三笠は右舷副砲陣地にいた。ここには十五・二cm単装砲が七門設置されている。日本海海戦では全主力艦が右舷のみで砲撃したので、ここは壮絶な戦場となっていた。

三笠はその中の一門の副砲に近づくと、そつとそれを撫でた。

この大砲には思い入れがある。日本海海戦の時、彼女は彼と一緒にこの大砲で敵艦『オスラビヤ』を撃沈した。

三笠にとつて、大切な思い出だ。

「・・・早く、帰って来て」

今はいない彼の帰りを、三笠はずつと待ち続けていた。毎日、こうして・・・

「三笠殿ッ！」

その声に振り返ると、そこには肩を上下に動かして荒い息をする金剛が立っていた。

「・・・金剛？」

「三笠殿。ここで何をしていますか？」

金剛は息を整えながら問う。そんな彼女の問いに、三笠は無視してスツと踵を返して去ろうとする。

「待ってください三笠殿！」

金剛は走って彼女の追いつくと、その前に立ち塞がる。だが、三笠は驚いた様子もなくじつと感情の込もっていない瞳で見詰める。

「・・・どいて」

「その前に私の問いに答えてもらいたいです。三笠殿は、一体誰を待っているのですか？」

「・・・あなたには、関係ない」

「そ、それはそうかもしれませんが。しかし、気になるのです！」

私は三笠殿が大好きです。だから、もつと三笠殿を知りたいのです。その為には、あなたの待ち人も知りたいのです！」

金剛は必死だった。

初めて会った時、心を許せた人。

大好きで、姉のように慕っている人。

そんな彼女と距離を感じる。その距離が一体何なのか、それはわからない。でも、その待ち人を知れば何かがわかる気がしたのだ。

金剛の必死な問いに、三笠はしばし沈黙していたが、そつと小さく口を開いた。

「・・・私が、心の底から愛している人」

三笠はそれだけ言うつと、光に包まれて消えた。だが、金剛はそれを追う事はできなかった。

『・・・私が、心の底から愛している人』

話は聞いていた。

三笠には大好きな、愛している人間がいるという事。

その彼と共に、あの苦しい戦争を戦い抜いた事。

どうしようもなく、その人の事が好きな事。

どうやら敷島と朝日もその人の事が好きらしい。先程の会話でなんとなく予想がついた。

今その彼は『三笠』を離れて陸の司令部に勤務しているらしい。

そしてもうすぐ、参謀となって戻って来る。

金剛は今まで蓄えていた情報の全てを、その瞬間に繋げた。

そして、わかった。

この不安が、何なのか。

「・・・嫉妬か」

大好きな三笠を、顔も名前も知らない人間の男に取られるのが嫌

だったのだ。

認められない。認めたくない。

自分が姉のように慕う三笠を、英雄王を、男なんて野蛮な生き物に奪われたくない。

「三笠殿は、誰にも渡さない・・・ッ！」

金剛は甲板を蹴って走った。目指すのは三笠の所。

誰にも渡したくない、大好きで大切な姉みかさを守る為に、金剛は走った。

その後、金剛は今まで以上に三笠にべったりになった。しまいには一緒に寝たいとまで言い出した。敷島と朝日が止めたが、金剛は断固として譲らず、三笠は渋々といった具合で了承した。

三笠と金剛は常に一緒だった。

仕事中も、休憩中も、食事も、お風呂も、寝る時も。ずっとずっと一緒だった。

三笠も、そんな金剛に幾分か心を開いていた。

朝日曰く、三笠がここまで心を開いたのは彼女の想い人以来らしい。敷島も朝日も、その領域にはまだ達していないそうだ。

金剛は嬉しかった。

今自分は大好きな三笠の中で大きな存在になっている事が。

嬉しくて、嬉しくて、大好きな姉に抱き付いた。三笠はそんな彼女の柔らかな髪をそつと撫でた。その時の表情は、少しだけ嬉しそうであった。

休みの日はキャッチボールをしたり、あやとりを教えてもらった。手料理を作って、三笠にこちそうしてほめられた。

ある夏の暑い日、一緒に泳いだ。水を掛け合って、楽しかった。

まあ、三笠は相変わらず無表情でやられつつ放しだったが。その際に泳ぎも教えてもらった。金剛も泳げたが、三笠はまるで魚雷のように早く泳げた。その姿に、憧れた。

勉強も教えてもらった。特に海軍の伝統や戦略・戦術。兵法など、

日本海軍の全てを理解しようと金剛は必死になった。

全ては三笠に好かれる為。三笠に気に入ってもらう為。三笠の傍にいたい為。

三笠の、一番になる為。

金剛は、必死にがんばった。

蝉の声がすっかり落ち着いてしまった頃のある日、金剛は三笠と共に甲板を散歩していた。会議はすでに終了し、残る時間は全て空き時間だ。

今日は三笠に一体何を作ってあげようと料理の献立をウキウキと考える金剛。そんな彼女に、三笠は小さく笑みを浮かべてそっとその頭を撫でる。それだけで、金剛は幸せだった。

こんな時がずっと続けばいい。そう思っていたし願っていた。

だが、その願いは突如として儚くも崩壊した。

「三笠！」

その聞き覚えのない、男特有の低い声に金剛は警戒心を抱いた。そして、怖くなって三笠の顔を見て、絶句した。

三笠の瞳から、ポロポロと涙が零れ落ちていた。

驚きながら、混合は三笠の視線を追う。するとそこには見慣れない士官が立っていた。肩に掛けられた参謀の証である参謀懸章という金色の縄が掛けられている。

年は二〇代前半くらい。まだどこか幼さを感じる顔立ちに屈託のない笑顔が似合う、そんな青年であった。

金剛の中で、胸騒ぎがした。

答えを理解する前に、三笠が動いた。

「……驚ッ！」

あの冷静沈着でクールな三笠が、まるで小さな子供のように彼に向かって全力疾走に走り出す。金剛は、それを追う事はできな

った。

「・・・驚ッ！」

「三笠！」

大好きな三笠が、名前も知らない男の胸に飛び込んだ。

その瞬間、金剛の中で何かが壊れた。

大好きな姉を取られた妹の心境だ。悔しくて、悲しくて、切なくて、辛い。

三笠は金剛が今まで見た事のないような満面の笑顔を浮かべて彼の腕の中に納まると、ボロボロと涙を流しながら彼の名前を叫び続ける。

「・・・驚ッ！ 驚ッ！ 驚ッ！」

「ああ、わかったわかった。少し落ち着け三笠」

「・・・だ、だって半年も会えなかった！ 寂しくて、悲しくて

」

「それは僕も同じだよ。でも、帰って来たんだ。お前に会う為に」

「・・・驚・・・ッ！」

三笠は泣き崩れる。

ずっと感じられなかった大好きな温もり。

大好きな彼が帰って来てくれた。それだけで、嬉しかった。もう何もいらぬ。彼さえいれば、他に何もいらぬ。

恋する乙女とは、そういうものであった。

ずっと寂しい想いをさせてしまった三笠を抱き締めながら、驚はふと果然と立ち尽くしている金剛に気づいた。

「三笠。あの子は誰？ 見ない顔だけど」

「・・・金剛。期待の新生」

それだけで驚は十分理解できた。先日新鋭巡洋戦艦がイギリスから回航して来た事はすでに末端の兵士まで知れ渡っている。

「君が新鋭艦の艦魂か。僕は第一戦隊参謀、鶴鷺鷺大尉。よろしくね金剛」

驚は優しく微笑んだ。その笑顔はとても魅力的で、普通の女の子

ならちよつとドキツとしてしまつような、優しく、温かな笑顔。

だが、金剛は普通の女の子とは違った。姉を取られた、寂しい妹。その恨みは全て彼に向かつている。

「あ、あれ？ 何か僕睨まれてる？」

「・・・金剛？」

三笠が不思議そうに振り替へた刹那、彼女の腕に金剛が抱き付いた。驚く驚く向かつて金剛はキツと、そのクリツとした瞳を刃のように鋭くして睨み付ける。

「三笠殿は渡さないッ！ 三笠殿は私の大切なお方だッ！ 貴様のような愚民が触れられるような相手ではないッ！ 即刻去れッ！」

「え？ あ、あれ？ 僕もしかして嫌われてる？」

「貴様のような者を好く訳がなかるうが！」

金剛の中で、今まで眠っていた何かが覚醒しようとしていた。

何者も恐れない鉄の心。

己が大切なものを守る為に命を捧げる強き志。

絶対の信頼を寄せる忠誠心。

三笠に今まで習っていた全てが、彼女の中で新たな《金剛》を作り出そうとしていた。

金剛は三笠を驚から引き剥がすとその前に立ち塞がる。

小さな少女でしかないその姿。だが、その身に纏う気迫はすさまじい。全身から容赦のない殺気が噴き出す。

驚は本能的にヤバイと感じていた。逃げなければ、本気でヤバイと だが、金剛は逃がしはしない。

腰に挿した、三笠にもらった大切な竹刀を握ると、構える。そして、

「天誅ッ！」

ダンッという踏み込みと共に竹刀を鋭く突き出す。その先端は容赦なく驚の鳩尾みそおちに炸裂。勢いは止まらずそのまま吹き飛ばした。

悲鳴を上げる事な吹き飛ばされた驚は放物線を描いてしばし滞空した後甲板に激突。そのままピクリとも動かなくなった。

金剛の瞳が、刃のように鋭く鬼畜を射る。

三笠の顔からサーツと血の気が引いた。

「・・・しゅ、驚ッ！」

三笠は慌てて失神した彼に駆け寄ろうとするが、そんな彼女の袖を金剛が掴んだ。振り返ると、先程までの気迫はどこへやら。今にも泣きそうな、小さな女の子がそこにいた。

「三笠殿・・・行ってしまうのですか？」

「・・・だ、だって驚が」

「行かないください。私は、三笠殿が大好きです。三笠殿を失いたくありません。三笠殿を、誰にも取られたくないのです」

「・・・金剛」

「行きましょう三笠殿。今日は私の手作りハンバーグですよ」

「・・・で、でも」

大好きな彼が倒れているのに、見捨てるなんて事はできない。三笠は金剛の手を振り切っても彼に駆け寄りたかった。だが、
「・・・もし、行かれるのなら、私は三笠殿と絶交させてもらいます。その方が、私としても諦めがつきますので」

その言葉に、三笠の瞳が大きく見開かれる。

わかつている。自分は一番ではないと。一番は、あそこで倒れている下郎。そして二番が自分だと。

でも、わかつてても嫌なものは嫌だ。

失いたくない。ずっと傍にいたい。

それに耐えながらこのままも生きるなんて、嫌だ。だったら、はつきりした方がいい。

金剛は、三笠の答えを待った。

そんな彼女の視線を受ける三笠は、困り果てていた。確かに自分は驚が誰よりも好きだ。一番。それは変わらない。だけど、金剛だって二番だけど好きなのだ。この一ヶ月、ずっと一緒にいた大切な存在。それを失うなんて、できない。

何度も何度も驚と金剛を見比べておろおろとする。ここまで動揺

する彼女も珍しい。

一分近く悩んだ末に、三笠が出した結論は

「・・・行こう、金剛」

心の中で、三笠は鷲に謝った。

小さな女の子の泣き顔を見たくない。それは古今東西変わらない事だ。しかも相手は金剛。今回ばかりは抗えなかった。

一方の金剛はそんな三笠の言葉にパアツと顔を華やげ、満面の笑みを浮かべる。

「では行きましょう三笠殿ッ！今日は腕によりをかけてお作りします！」

そう嬉しそうに笑みを浮かべながら、金剛は三笠の腕を取って走る。三笠は金剛に手を引かれながら、いまだに動かない彼を見詰め、小さく「・・・ごめんなさい」とだけつぶやいた。

その後、鷲は通り掛った敷島と朝日に発見され、無事に保護された。

これが、後に《鬼の金剛》と呼ばれる金剛が最初に目覚めた出来事であった。

この事件以降、『三笠』に正式に配置された鷲は三笠に近づこうとするが、そのたびに金剛の逆襲に遭うという日々が始まった。

鷲は三笠に近付きたい。金剛は鷲が邪魔。三笠は鷲に近付きたくても金剛を泣かせたくない為に動きが制限される。

鷲と金剛の、三笠争奪戦が勃発したのであった。

それから時は流れて一九二二年、日米英の建艦競争終結の為に行われたワシントン海軍軍縮条約によって戦艦『三笠』の廃艦が決定された。

翌年九月一日、関東大震災によって『三笠』は岸壁に激突して浸水。二〇日には帝国海軍から除籍された。

廃艦は解体されるのが運命。『三笠』も解体が決定されたが、日露戦争の英雄艦である『三笠』は国民からも親しまれており、保存運動が勃発。政府は世論に積極的になり米英などに『三笠』解体を廃止してもらおうと直訴。世界海軍においてもBattle ship『Mikasa』は有名であり人気も高く、特別措置として現役復帰不可能とする事を条件に保存が認められた。

一九二五年一月、に記念艦として横須賀に保存される事が閣議決定された。同年六月十八日、保存工事が開始され、十一月十日に終了。十二日に保存式が行われ、記念艦『三笠』が誕生した。

時は少し戻って『三笠』が正式に帝国海軍を除籍した日。連合艦隊の艦魂達ほぼ総出で三笠の退艦式が行われた。

横須賀が舞台なのに佐世保、呉、舞鶴などから祝文や贈り物が届き、三笠に渡された。

三笠は両手にプレゼントは花束をたくさんもらいながらも無表情を貫いていた。彼女らしいといえば彼女らしい。

集まった艦魂の中にはまだ若い比叡、榛名、霧島、扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥などの姿もあった。

そんな中、泣きじやくりながら三笠にお別れをする金剛。竣工して十年近く経ち、彼女も見えた目が十八歳くらいにまで成長。瞳も幾分か鋭くなり、剣豪として皆から恐れ親しまれるようになっていた。ライバルの存在が、金剛を後に恐れられる《鬼の金剛》に向かつて確実に成長していた。

だが、今はまだ子供。泣いてしまう事もある。

「三笠殿・・・長年のお勤めご苦労様でした。後は、我々に任せてゆつくり休まれてください。そして、我々が守る日本を、見守ってください」

金剛の言葉に、三笠はうなずいた。そして無言のまま、腰に挿した竹刀と短剣を抜くと、それを金剛に渡した。

「三笠殿？」

「・・・我が志、金剛に預ける。私が守った祖国を、よろしく」
「はッ！」

金剛は三笠から竹刀を受け取り、元々腰に挿していた竹刀を比叡に預け、腰に挿す。短剣も腰に挿した。それを見て三笠は小さくうなずく。

「・・・これから、日本は激動の時代に進むはず。アメリカとの戦いも、避けられないかもしれない。だけど、あなた達ならきっと乗り越えられる。私は、信じている」

「はッ！」

「・・・金剛。あなたに、この国の命運を任せる。我が志、《大和魂》を末永く、日本艦魂に伝授して」

「もちろんです。お任せください」

三笠はうなずくと、周りを囲むすっかり様変わりした艦魂達を見回す。

建艦技術の進歩から、輸入艦はなくなった。皆国産の軍艦達。黒髪黒瞳の、日本人らしい姿で編制されたのだが、今の日本海軍だ。

だが、志は同じ。むしろ純粋な日本人である彼女達の方が、ずっと強い。

彼女達なら、日本を任せられる。そう心から思っていた。

「・・・我が帝国海軍は永久に不滅。諸氏らの健闘を祈る。日本を、任せた」

バツと集まった艦魂皆が見事な敬礼をし、三笠もそつと敬礼した。そして、光が彼女を包み込む。金剛は駆け寄りたいた衝動を必死に抑え、涙を流しながら英雄王の新たな旅を見送る。

光が彼女を全て包み込む寸前、三笠は小さく笑みを浮かべた。それを最後に、光は消え、三笠はいなくなっていた。

金剛は、泣き崩れた。

大好きな、姉のように慕っていた三笠がついに退艦した。悲しくて悲しくて、仕方がない。

でも、それ以上にこれからは彼女の残したこの海軍を守る為に自

分ががんばらなくてはという気持ちが生まれる。

自分に厳しく、他人に厳しく。

帝国海軍という、三笠が残してくれた最高の軍隊を、日本を守る。そう、決意した。

心配する比叡と霧島の手を借りずに立ち上がった金剛の瞳は、刃のように鋭く、その志は強く輝いていた。

《鬼の金剛》の歴史が始まった瞬間であつた・・・

三笠は自艦の甲板に立つと、遠くに浮かぶ連合艦隊の勇姿を目に焼きつけ、いつまでも敬礼し続け、ドックに向かって出港した。

「・・・それが、私と三笠殿の別れであつた」

いつの間にかすっかり大掃除モードではなくなつてしまつた。大和達は皆席に座つて金剛の話を聞いていた。

「その後、私は横須賀に行けば必ず三笠殿に面会をした。艦魂は基本的にある一定以上には年を取らない。三笠殿は今も美しいお姿で日本の命運を、我々を見守つていらつしやる」

金剛の瞳は、どこか心に在らずという感じであつた。きつとその視線の先には横須賀にいる尊敬する上官にして姉である三笠が見えているのだろう。

「彼女を知る者は皆色々と言うが、私は彼女と本気でぶつかった。彼女がどれだけすばらしい艦魂だったか、私は知っている。三笠殿は紛れもなく、我が帝国海軍の英雄王だ」

そう言つて、金剛は静かに瞳を閉じると、そつと皆に向き直る。大和と武蔵は初めて知つた金剛と三笠の關係に驚きつつも感動（これは大和だけ）していた。長門達もここまでの話は初めてだったのか、感動していた。知つている榛名もだ。

部屋の中を、どこか暖かな雰囲気流れる。

日本を守る為に行き、ロシアと戦つた英雄の真の姿。それは普通の女の子と変わらず、普通に恋をし、普通に悩み、普通に笑つてい

た。

そんな英雄の志を受けた金剛。あれだけ純粋な女の子だった彼女がここまで変わったにも、全ては三笠の志を貫く為。

日本を、守る為だ。

自分に厳しく他人に厳しく。そうして彼女は生きてきたのだ。

姉との約束を、守る為に・・・

一人の英雄の話と、一人の少女の話。

だが、すばらしい話であったと同時に、気づいてもらいたい。

三笠の為に必死になる少女、三笠に笑顔を振りまいた少女、三笠を取られたくないばかりに彼女の好きな男性を吹き飛ばした少女

金剛の恥ずかしい過去大暴露である事を。

そして、話はすぐにそんな金剛の昔話に向かって全力疾走する。

「姉貴は、ほんと昔は三笠さんにべったりだったもんな。俺や比叡姉さん、霧島なんかに構わずいつつもだぜ？」

「うちも覚えとる。金剛はんの話よりはずっと後やけど、それでも今は考えられんくらい甘えん坊さんやったなあ」

「でもだからって、十年近くも一緒に寝る？ 私という者がないながら、金剛ひどいわあ」

「そういえば、よく鶴鷺少佐を竹刀でボコボコにして三笠様に怒られていらっやいましたね」

金剛の過去を知る長門達から出るわ出るわ金剛の恥ずかしい昔話列伝。大和と武蔵は今の金剛とのギャップに笑いを堪えていた。

あの金剛が、少女時代ではかわいらしい女の子だった。それだけで爆笑ものである。

ゆらりと殺意の風が流れ、大和達は恐怖しながら振り返る。

そこには顔を真っ赤にしてプルプルと体を震わせ、怒りと恥ずかしさで頭がどうにかなりそう　つまりはとてつもなく激怒している

金剛が・・・

「き、貴様らあッ！ 全員海軍精神を叩き直してやるッ！」

「やべえッ！ に、逃げろおッ！」

榛名に言われるまでもなく、全員が一斉に逃げ出した。その後を、鬼の金剛が追いかける。

悲鳴や怒号、爆発音や破裂音を轟かせながら金剛達は部屋から離れていく。

誰もいなくなった部屋の隅にある神棚。そこには三笠から受け継いだ大和魂が込められた短剣が、埃一つ被らずに飾られていた・・・

（後書き）

日露戦争編登場キャラ

《三笠》 みかさ

敷島型戦艦四番艦 戦艦『三笠』

出身 バロー・イン・ファーンズ造船所（イギリス）

身長 162cm

髪型 長髪（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 11歳

外見年齢 17、8歳

誕生日 3月1日

家族構成 姉・敷島・朝日・初瀬（戦死）
はつせ

好きなもの 鷺・鷺と一緒にいる事・鷺に好かれる事

嫌いなもの 鷺に近づく女・鷺に嫌われる事

以前執筆したが途中で挫折して削除した日露戦争編の主人公艦にしてメインヒロイン。無口無表情であり社交的ではなく、一匹狼に近い部分がある。主人公である鷺の事が大好きで、彼の為だったら何でもする。武蔵以上に厄介なキャラ。日露戦争編では大和並みの年齢の少女だったが今作では成長して大人な女性に近付いている。キャラとしては大和・武蔵的な位置。日露戦争編復活は未定。

《敷島》 しきしま

敷島型戦艦一番艦 戦艦『敷島』

出身 テームズ鉄工所（イギリス）

身長 167cm

髪型 長髪（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 13歳

外見年齢 18、9歳

誕生日 1月26日

家族構成 妹・朝日・初瀬（戦死）・三笠

好きなもの 鷺・鷺にほめられる事・紅茶・平和

嫌いなもの 鷺に嫌われる事・鷺が他の人に取られる事・平和

三笠の姉。破天荒な三笠の補佐をしている。三笠がわがまなな為そのしわ寄せはいつも彼女に集中。結構な苦労人。鷺の事が好きで、三笠などと争う事もしばしば。キャラとしては陸奥的な位置。

《朝日》 あさひ

敷島型戦艦二番艦 戦艦『朝日』

出身 ジョン・ブラウン社（イギリス）

身長 165cm

髪型 セミロング（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 13歳

外見年齢 17、8歳

誕生日 4月28日

家族構成 姉・敷島 妹・初瀬（戦死）・三笠

好きなもの 鷺・みんなお笑顔・誰かを守る事・みんなで楽しく過ごす日々

嫌いなもの 平和を脅かす存在・乱暴者・風紀を乱す者・容赦のない敵・エッチな話

日露戦争編とは唯一まるで異なる設定のキャラ。原作は妹系のキャラだったが、出雲と被るので却下。今回は榛名のような男っぽくも乱暴ではない新タイプ。鷺の事が好きだが素直になれないでいる。恋愛経験がなく、どうすればいいかもおろおろ。エッチな話に弱い。でもいつも一生懸命。新キャラを作るも、現在執筆再開は未定。キャラとしては未知設定

《富士》 ふじ

富士型戦艦一番艦

戦艦『富士』

出身 テームズ鉄工所（イギリス）

身長 162cm

髪型 長髪（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 16歳

外見年齢 16、5歳

誕生日 8月17日

家族構成 妹・八島やしま（戦死）

好きなもの 詳しい設定なし

嫌いなもの 詳しい設定なし

日露戦争編にも登場するキャラだが、現段階であまり目立ったキャラではないので詳しい設定はない。胸がペタンコで幼女体形なのを気にしている。しかも妹の八島はモデルのようなスタイル。そのギャップから《富士平野八島大山》と呼ばれている。キャラとしては霧島的位置。

《出雲いずも》

出雲型装甲巡洋艦一番艦 装甲巡洋艦『出雲』

出身 アームストロング・ホイットワース社（イギリス）

身長 158cm

髪型 ツインテール（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 12歳

外見年齢 14、5歳

誕生日 9月25日

家族構成 妹・磐手

好きなもの 鷺・日向ぼっこ・おかし・甘いもの・楽しい事

嫌いなもの 暗い所・怖い話・辛いもの

日露戦争編にも登場するキャラ。《艦魂年代史》ドキッ 恋する乙女は大艦巨砲主義《》にも登場するが、その頃はすっかり大人な女性に成長している。この頃はまだ子供で、鷺の事をお兄ちゃんと呼んでいた。キャラとしては隼鷹的位置。

《いわて磐手》

出雲型装甲巡洋艦一番艦 装甲巡洋艦『出雲』

出身 アームストロング・ホイットワース社（イギリス）

身長 160cm

髪型 サイドテール（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 12歳

外見年齢 16、7歳

誕生日 3月18日

家族構成 姉・出雲

好きなもの 詳しい設定なし

嫌いなもの 詳しい設定なし

日露戦争編でも一、二度しか登場していないので詳しい設定はない。ただ、出雲が鷲の事を好きなのを知っていて、鷲に対して何らかの反感を持っている。キャラとしては飛鷹的位置。

《つるやぎ鶴鷲》

役職 帝国海軍軍人・第一戦隊参謀

出身 長崎県佐世保市

身長 165cm

年齢（1913年8月現在） 25歳

誕生日 12月25日

家族構成 父・鷹明（戦死）たかあき 母（病死） 兄・隼人はやと 姉・鷲花おづか

妹・朱雀・雀すずめ 義妹・千鶴ちづる

好きなもの 家族・艦魂達・軍艦（特に戦艦）・海・心から打ち解ける友達・困っている人を助ける・平和な日々・甘いもの

嫌いなもの 家族や仲間を侮辱される事・無力で弱い自分・誰かが死ぬ事・自己犠牲する人・筋の通らない話・死というのを軽々しく言う奴・戦争・苦いもの

日露戦争編主人公。基本的に翔輝とほぼ同じキャラ。ただし翔輝は

妹の翔香の死を引きずってそれがトラウマになっている暗い過去を持つが、鷺は逆に両親がいないのは翔輝と同じだが、兄妹は豊富。初期設定では鷺の父である鷹明は日清戦争の黄海海戦で防護巡洋艦『松島』の砲術長として参加。松島とも親しかったが同海戦で戦死。隼人は陸軍軍人で旅順攻略に参加予定。陸軍軍人である隼人と海軍軍人である鷺の間には確執がある。鷺花は優しいお姉さん。千鶴はツンデレ系妹。雀は天真爛漫な妹。千鶴は鷹明の親友の娘で、その彼が戦死した為に養子となって鶴鷺家の養女となる。鷺に対して絶対の信頼を寄せている・・・とまあグダグダ言ってきましたが、今の所執筆再開の予定はないので気にしないでください。

今作オリジナルキャラ

《金剛いそがひ（少女時代）》

金剛型巡洋戦艦一番艦 戦艦『金剛』

出身 ヴィッカーズ社（イギリス）

身長 154cm

髪型 長髪（金髪）

実年齢（1913年8月現在） 0歳

外見年齢 13、4歳

誕生日 8月16日

家族構成 妹（予定）・比叡・榛名・霧島

好きなもの 三笠・三笠にほめられる事・三笠と一緒にいる事

嫌いなもの 鷺・三笠を奪う者・三笠に嫌われる事

本編では《鬼の金剛》と恐れられている日本海軍最凶の艦魂だが、その少女時代は大和のように天真爛漫なとてもかわいらしい女の子であった。自分に優しく接してくれた三笠に心の底から尊敬しており、一緒に寝たり散歩したりするほど三笠が大好き。その為そんな彼女を自分から奪おうとする鷺の事は大嫌い。むしろ天敵。本文中では語られてないが、その後もすさまじい三笠争奪戦を繰り広げて

いる。しかも司令室の部屋を掃除したりお茶を淹れたりと、少女時代だった彼女は今とは比べものにならないほど女の子らしく優しい。三笠との別れが彼女を大きく変えた。彼女の為にも日本を守ろうと誓い、自分に厳しく他人に厳しく生き続け、今の彼女へと繋がった。

《香取》かとり

香取型戦艦一番艦 戦艦『香取』

出身 ビッカース社（イギリス）

身長 163cm

髪型 長髪（金髪）

実年齢（1913年8月現在）7歳

外見年齢 22、3歳

誕生日 5月20日

家族構成 妹・鹿島

好きなもの かわいい女の子・抱き締める事・かわいいがる事
嫌いなもの 特になし

今作オリジナルキャラの一人。今までにないキャラで、殺人級に胸が大きく、かわいい子を抱き締めてその胸に埋めるのが大好き。多くの艦魂が水兵、下士官、士官関係なく犠牲になっている。口調もどこか伸びてのほほんとしている。しかしその柔らかな雰囲気から皆に慕われている。キャラとしては一応比叡的位置。

《鹿島》かしま

香取型戦艦二番艦 戦艦『鹿島』

出身 ビッカース社（イギリス）

身長 158cm

髪型 長髪（金髪）

実年齢（1913年8月現在）7歳

外見年齢 17、8歳

誕生日 5月23日

家族構成 姉・香取

好きなもの 詳しい設定なし
嫌いなもの 詳しい設定なし

今作オリジナルキャラの一人。香取の妹で、いつも能天気な姉である香取に振り回されているかわいそうな苦労人。あまり詳しい設定はない。

《薩摩》 さつま

薩摩型戦艦一番艦 戦艦『薩摩』

出身 横須賀海軍工廠（神奈川県）

身長 162cm

髪型 長髪

実年齢（1913年8月現在） 3歳

外見年齢 15、6歳

誕生日 3月25日

家族構成 妹・安芸

好きなもの 香取・香取と一緒に寝る事・香取に抱き締められる事
嫌いなもの 香取を誰かに取られる事・香取が他の子と親しくする事

今作オリジナルキャラの一人。薩摩型戦艦は日本初の国産戦艦であるが、完成前に『ドレッドノート』が竣工してしまい、完成以前に旧式艦の烙印を押されてしまったかわいそうな戦艦の一隻。冷静沈着でクールでも優しく接してくれる頼りがいのあるキャラ。皆からの信頼も厚く、敷島の補佐役。ただし香取の事が大好きで彼女には逆らえない。彼女はそれを必死に隠しているが周囲にはバレバレ。

《安芸》 あき

薩摩型戦艦二番艦 戦艦『安芸』

出身 呉海軍工廠（神奈川県）

身長 155cm

髪型 ショートヘア（白羽の髪留め付き）

実年齢（1913年8月現在） 2歳

外見年齢 13、4歳

誕生日 3月11日

家族構成 姉・薩摩

好きなもの 詳しい設定なし

嫌いなもの 詳しい設定なし

今作オリジナルキャラの一人で薩摩の妹。おもしろい事が大好きでいつも笑っている。キャラとしては日向的位置。

作者「新年明けましておめでとうございます。今年もまたよろしく
お願いします」

大和「さて、2009年最初の作品は何と金剛さんの過去のお話」

長門「それも、金剛がすごくかわいかった頃の話よ」

金剛「う、うるさいッ！」

伊勢「せやけど、ほんまに変わったなあんだ。あのまま優しい子で
成長してくれば万々歳やったのに」

金剛「黙れッ！ 私がいなければ規律が乱れるであろっがッ！」

陸奥「ま、まあ確かにそうかもしれないませんが」

武蔵「・・・うるさいだけ」

金剛「な、何だとおッ!？」

翔輝「お、落ち着いてください金剛さん。ここは一応本編とは関係
ない空間なんですから」

金剛「う、うむ・・・」

榛名「しっかし、三笠さんってやっぱり結構武蔵に似てるよな」
作者「そりや似せて作ったもの」

翔輝「確か、原作の頃の本編で武蔵が人気1位を取ったから武蔵のようなキャラをメインヒロインに立てたんですよね？」

作者「そうなんだ。でも結局は作品自体が頓挫しちゃってさ。もう僕もキャラとか軽く忘れてるし」

金剛「今すぐ書けッ！」

作者「無理ですッ！今はモンハンを重要視したいんですう！」

大和「そういえば作者さんが書かれているその作品、確か《モンスターハンター》恋姫狩人物語》でしたっけ？ランキングで総合4位だったじゃないですか」

作者「あ、うん。もう僕のキャラパシティーを軽く超えちゃって、プレッシャーで潰されそうだよ」

榛名「お前、本当に何作家なんだよ？意味わかんねえぞ」

作者「あ、うん。僕も最近わからなくなってきた」

金剛「まったく。して、《艦魂年代史》恋する乙女は大艦巨砲主義》はどうなのだ？」

大和「あ、すぐく気になります」

伊勢「うちもうちも」

武蔵「・・・(コクコク)」

長門「前は見つける事もできなかったのよね」

作者「えっと、《艦魂年代史》恋する乙女は大艦巨砲主義》は総合18位だね。結構伸びたよこれ」

陸奥「すごいじゃないですか」

榛名「でもよお、モンハンが4位で俺らが18位ってどうよ？」

長門「まあ、向こうの方が読者層広いし、人気もあるし。仕方ないんじゃない？」

作者「ちなみに草薙先生の紀伊は16位だったよ」

伊勢「ほんま、草薙はんは強いなあ」

大和「極上艦魂会の司令長官、草薙先生に譲ったらどうですか？」

作者「うん。別に僕はそれでもいいんだけどね」

金剛「愚か者ッ！貴様それでも軍人かッ！」

作者「いや、僕一般市民だけだ」

金剛「司令長官という高貴ある役職をそう簡単に投げ出すとは何事だッ！ 恥を知れッ！」

作者「そんなに言われるような事かな？」

長門「まあまあいいじゃない。せっかくのお正月なんだし、みんなでおせちでも食べましょよ。おもちもいっぱいあるわよ」

大和「うう、でもおもちってカロリーがありますから・・・太っちゃいます」

作者「大丈夫でしょ。それに大和型戦艦は他の戦艦を凌駕するほど重い　ごはあッ!？」

大和「女の子の体重をとにかく言うなんて最低ですッ！」

武蔵「・・・死ね！」

作者「ぎゃあああああッ！」

金剛「まったく。おいそんなゴミは放っておけ。さっさと行くぞ」

榛名「まったく、新年早々アホだなあいつ」

長門「じゃあ皆さんお正月楽しんでねえ」

陸奥「さようなら」

伊勢「またな」

大和「まったくうちのバカ作者は　あ、皆さん。今年もまたよろしく願います。最近うちの作者艦魂が不調ですが、今年もがんばらせますので、どうか応援よろしく願います。それと、私達黒鉄艦魂から皆さんにお年玉企画を提供します。なんと、今現在サイトには画像投稿サイト《みてみん》というものがあります。そこにうちの作者が書いた私達のイラストが数枚投稿されました。素人の絵なのであんまり期待はしないでくださいね？ 私達はもっとかわいいですよ？　ではお正月をどうかお楽しみください。またどこかでお会いしましょう！」

武蔵「・・・風邪引かないように、手洗いうがいは忘れずに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8376f/>

艦魂年代史外伝 ～金剛と三笠 受け継がれし大和魂～

2010年10月8日10時57分発行